

世田谷文学館

2014年度資格取得

川本 瑞貴

世田谷文学館について

世田谷文学館は1995年に東京都内では初めての地域総合文学館として開館しました。当館は初代館長・佐伯彰一（アメリカ文学者）の提唱した「文学はあらゆるジャンルに遍在する」という運営方針のもと、文学作品はもちろん、映画・音楽・写真・絵本、もちろん漫画も文学作品として調査研究を行い、分野の枠組みを超えたジャンル横断型の展覧会を開催しています。また、展覧会のほかにも当館の特徴的な博物館活動として、教育普及事業に力を入れている点もぜひお伝えしたいと思います。当館の普及事業は「ことば」をテーマに、これまで「ことのははくぶつかん」という名称で、俳句や落語、ダンス、絵画制作や音楽作りなどの創作活動のほか、山登りを含む野外ワークショップを行い、文学を大きくとらえて対話の輪を広げるコミュニケーションに重点を置いた普及活動を行ってきました。現在は「どこでも文学館」（愛称：どこぶん）と名称を変え、子どもから大人まで、年齢や性別を問わず参加できるさまざまなワークショップを継続して実施しています。また、先のコロナ禍では当館では初の試みである、在宅でも参加できるオンラインワークショップを実施しました。SNSツール「Instagram」のインスタライブにて、リアルタイムで講師と参加者とをつなぎ、双方向にやり取りしながら創作に取り組む工作ワークショップを実施し、様々な制約のある状況下をチャンスに変えながら、来館者のニーズに合わせる企画を実施しました。このワークショップには、普段は在宅で障害のあるお子さんの介護をされている方や、遠方にお住まいで初めて当

館のワークショップに参加された方から、「楽しんで参加できた」などのコメントが寄せられ、普及事業の新たな可能性を実感した業務となりました。また、当館では開館4年目から「出張展示」という事業を行っています。本事業では、世田谷ゆかりの作家や作品の紹介のほか、企画展の内容をコンパクトに持ち運びできる展示キットを構成し、区内の小中学校や図書館ほか、全国の公共施設までを対象に貸し出しを行っています。このような利用者を館に迎えるだけでなく、出張型の展示やオンラインを活用して、博物館から様々な企画を提案し出向いていく「どこでも文学館」は、当館でも最も重要な業務の1つであるといえます。

館内での取り組みの1つとしては、2015年から「セタブンマーケット」と題して、当館にゆかりのある作家たちに身の回りの品を出品していただいたり、区内の古書店や雑貨店を募って館内で出店してもらう、蚤の市を開催するなど、開館当初から現在まで、さまざまな形で「文学に触れる・文学を体験する」機会を提案しています。

収蔵資料の面では、世田谷文学館の収蔵方針として、明治期以降の世田谷区にゆかりのある作家や、世田谷を舞台とした作品など、区ゆかりの作家・作品を収集し保存しています。2024年時点では収蔵資料数は10万点を超え、主な収蔵資料に横溝正史や江戸川乱歩、斎藤茂吉、北杜夫、山田風太郎、森茉莉などの自筆原稿や



「出張展示」群馬県川場村での展示風景

卒業生による活動報告

書簡のほか、海野十三の8ミリ映写機や横光利一など作家の愛用の品々など、原稿や書籍のみならず作家の人となりを知ることのできる多彩な資料を収蔵しています。また、当館のある世田谷には、映画会社の東宝の撮影スタジオがあることから、映画監督の黒澤明『七人の侍』の人物スケッチ、『人間の条件』などで知られる小林正樹の撮影台本やスチール、世田谷ゆかり作家である林芙美子著の『浮雲』でメガホンを取った成瀬巳喜男の映画関連資料などを収蔵しています。このほか特徴ある収蔵資料として、特撮作品「ゴジラ」や「ウルトラマンシリーズ」の撮影で実際に使用されたウルトラマンタロウの小道具のヘルメットや銃、台本などの資料も収蔵しています。

当館にはいわゆる常設展はなく、前期・後期と年2回、当館の多彩な収蔵資料を作家や作品毎に、企画性のあるテーマで展示するコレクション展を展開しています。

明治・大正・昭和と、今は昔となりゆく作品も、見方を変えると現在を生きる私たちと地続きの時間軸上にあり、その作品を生み出した作家が確かに存在したということを体感的に鑑賞できる展示を目指して、日々展示活動に取り組んでいます。

学芸員の業務は多岐にわたりますが、私がこれまで携わってきた展覧会業務の一例では、当館収蔵資料品展であるコレクション展「綴じられた時間の物語—ムットーニのからくり文学

館」、「下北沢猫町散歩」、企画展では「安野モヨコ展」「原田治展」「小松左京展」、昨年度は企画展「石黒亜矢子展 ばけものぞろぞろ ばけねこぞろぞろ」、今年度は「伊藤潤二展 誘惑」「漫画家・森薫と入江亜季 展」を担当しました。

後者3つの企画展は、全国巡回を見据えて、新聞社や出版社との共催企画として巡回パッケージの基礎となるコンセプトづくりから携わりました。当館は全国巡回の立ち上げ館の仕事を担うことも多く、デザインや展示点数など巡回を考慮した内容を考える部分もちろんありますが、当館にしかできない「世田谷文学館らしさ」という面も大切にしながら企画に取り組んでいます。また、近年では現役作家の方の展覧会を開催させていただくことも多く、展示へのご意向を最大限反映できるよう、作家と密にコミュニケーションをとりながら準備を進めています。展示はただ空間を作るだけでなく、作品の特性（絵本作品であれば絵本としての見せ方など）を重視した展示方法や会場デザイン、解説パネルの書き方や分量を意識して開幕準備にあたっています。

学生時代の学び

子どもの頃から絵を描くことや物を作ることが好きで、美大へ進学したいと考えていました。その後、ミッション系の中高に通ったことから宗教画に興味を沸き、絵に描かれた人物や



「石黒亜矢子展 ばけものぞろぞろ ばけねこぞろぞろ」
会場風景



「伊藤潤二展 誘惑」
会場風景

モチーフの組み合わせにはどんな意味があるのか。絵が描かれた歴史や背景などを考えることがまるで謎解きのようで、中学生ながらその奥深さにのめり込んでいったことをよく覚えています。絵の歴史や背景を勉強するにはどんな大学に行ったらよいのだろうか？そんなことを知り合いの美大の先生に相談したところ、「実践女子大学なら良い先生方がいる最適な環境だ」と教えていただき、実践女子大学の美学美術史学科へ入学しました。学部生時代は、児島薫先生のもと日本近代美術史を専攻。卒業論文では藤田嗣治（レオナルド・フジタ）による宗教画について研究し、大学院でも引き続き、藤田による宗教画の表現、特に聖母子像について研究していました。また、博物館学課程を受講していた学部生の頃より関心のあった、教育普及事業をより専門的に学びたいと思い、大学院在学中には、東京都美術館のアートコミュニケーション事業部にて1年間インターンとして企画展や普及事業の補佐に従事しました。

私はあまり要領が良い方ではなかったので、修士論文の執筆と、当時のインターン勤務先で準備中だった企画展業務などを平行していくことに四苦八苦することも多々ありました。しかし、展覧会準備のため、作家や資料借用先の他の博物館とのやり取りや、展示構成・会場デザインの検討、図録の執筆やポスター制作の打ち合わせなど、〆ゼロから企画展を創る、ということを経験できたことは何物にも代えがたい経験であったと思います。

学芸員の仕事は教育普及である

学芸員としての業務には、企画展の準備やそれに付随する原稿執筆、収蔵資料の研究、新収蔵資料の調査、ワークショップの準備など、日々マルチタスクをこなしていくことも重要です。一方で、なにか「これは私にしかできない」という強みになることがあると、より自身の仕事にやりがいや楽しさを見いだせるのではないかと思います。私の場合は、よく世田谷の下北沢の街を歩いて、独立系書店やレコード店などを見て回り、気になる装丁の本や雑貨を見つけたり、舞台や音楽のワークショップをしているアーティストと話したりすることが企画展のアイデアやワークショップに生かせる新たな視点につながる事が多く、仕事をするうえでとても大切なプロセスになっています。

博物館の基本業務である「展示」「収集・保管」「調査研究」は、どれもが不可欠で、これらが相互に作用することが最終的に「教育普及」につながると思います。研究し、わかったことを成果として展覧会で発表する。多くの人に展示を見て知ってもらい、成果を持ち帰っていただく。この展示活動そのものが最大の教育普及事業なのではないでしょうか。これから学芸員を目指す方がもしこのテキストを読んでくださっているのなら、ぜひいろいろな地域や時代、文化、分野、活動に興味関心を持ち、自身の強みを見つけてみてください。きっとあなたの支えとなるはずです。